

インドの
都市から
考える
第 回

巡還と因繞の都市構造



柳沢 究

名城大学理工学部建築学科 准教授

やなぎさわ・きわむ | 1975年横浜市生まれ。2001年京都大学大学院修了。2003年神戸芸術工科大学助手。2008年一級建築士事務所建築研究室設立。2012年より現職。博士(工学)作品:「斜庭の町家」「紫野の町家改修」「SAKAN Shell Structure」ほか。著書:『京都げのむ』『生きている文化遺産と観光』『無有』ほか。受賞:地域住宅計画賞、京都デザイン賞入選、雪のデザイン賞奨励賞、タキロン国際デザインコンペ2等ほか。

今年4月に名古屋に移り住み、この連載を担当させていただくことになった。筆者は建築計画・設計を専門とするが、10年以上にわたってインドに通い都市空間の調査を続けている。学生時代のアジア放浪旅行の最中にふと立ち寄った、ヴァーラナシーという都市の成り立ちに素朴な関心を抱いたのが出発点であった。以来現在に至るまで、その都市の発する不思議な魅力に導かれながら、南インドまで手を広げつつ研究を続けてきた。根っこにあるのは、複雑な都市や建築の形がどのような要因と過程を経て形成されてきたか、という興味である。研究の着地点ははまだ模糊としているが、インドの都市を見つめる中で、都市や建築を考える上でのさまざまな示唆を得てきた。この連載でその一端を紹介できればと思う。まずは筆者がフィールドとしている2つの都市、その概要とヒンドゥー教のコスモロジーと結びつけた都市構造について紹介したい。

ヒンドゥー教のコスモロジー

広大な国土の上に多民族による複雑な歴史と文化の綾が覆いかぶさる多様なインド。そのインドをまとめる重要な紐帯の一つがヒンドゥー教である。ヒンドゥー教は「way of life」、生き方そのものであるといわれる。それは、その観念や世界観が神々への信仰にとどまらず、日々の生活のあらゆる場面に浸透しているからである。もちろん都市や建築も例外ではない。

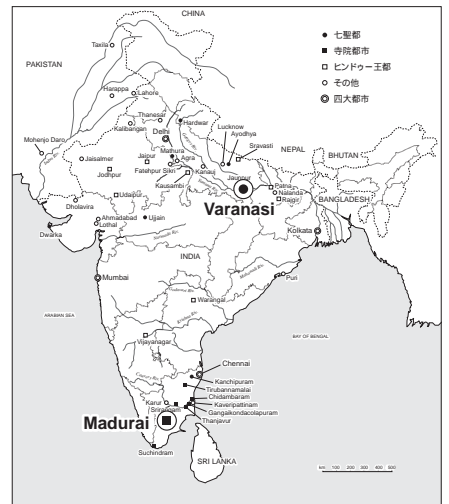
ヒンドゥー教の基層をなす観念の一つに「浄/不浄観」がある。世界には清浄(神聖・高貴)と不浄(穢れ・邪悪)の二極とその中間のさまざまな段階があり、その配置や関係をコントロールすることで世界の秩序は保たれる、というのが基本的な考え方である。いわゆるカースト制度とは、この観念が人間の階級区分と結びついたものである。またこれが世界観に適用されたのが、神々の住むメル山(仏教でいう須弥山)を頂点とする同心円構造のコスモロジーである(図1)。

筆者がフィールドとするヴァーラナシーとマドゥライという2つの都市では(図2)このようなヒンドゥー教のコスモロジーが、それぞれ異なった形で都市空間に投影されている。

ヴァーラナシー(Varanasi)

インド中北部・ガンジス川中流域に位置するヴァーラナシー(日本では「ベナレス」と呼ばれることが多い)は、ヒンドゥー教最大の聖地として世界にその名を知られる。ガンジス川の水はすべての罪障を浄め、死後に遺灰を川に流せば輪廻からの解脱が約束されるという。そのため都市にはインド中から年間200万を超える巡礼者が訪れ、川辺の火葬場では茶毘の煙が絶えることがない。

ヴァーラナシーの旧市街は三日月状に流れるガンジス川の片岸に広がる。狭隘な街路に家々が隙間なく建ち並び、場所に



左 | 図1: 同心円状の世界の中心にそびえるメル山(出典: 杉浦康平・岩田慶司、「アジアのコスモス+マンダラ」講談社、1982)
右 | 図2: ヴァーラナシーとマドゥライ

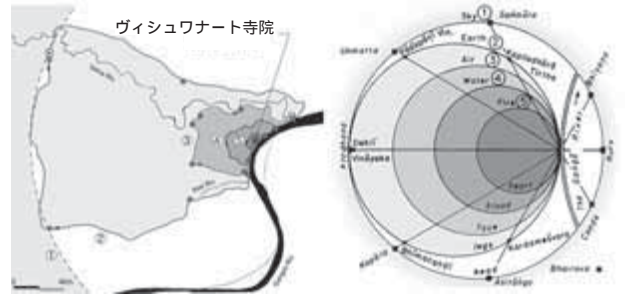
よっては人口密度が6万人 / km²を超える
 高密度な都市空間である(図3)。そのような
 街並みの中に、神話や伝説に彩られた夥
 しい一説では3,000という数の寺院・祠が
 存在する。そして驚くべきことに、これら
 のうち重要な寺院・祠を結ぶ巡礼路が、街
 の中にいくつも設定されている。ヴァーラ
 ナシーは巡礼の対象となる都市であると
 同時に、都市内部に巡礼路を有した「巡礼
 都市」なのである。

なかでも重要視されているのが同心円
 を描く五つの円環状の巡礼路である(図
 4)。それぞれが数十以上の寺院・祠を繋ぐ
 これらの巡礼路は、結界性(巡礼路の内
 側は聖域となる)、階層性(内側の巡礼路
 ほど功德が高い)、神々のマンガラ(ヒン
 ドゥー教の方位・数のシンボリズムに即し
 た神々の配置)といった特徴を持つ。つま
 りこれらの巡礼路群は総体として、前述し
 たヒンドゥー教のコスモロジーを都市ス
 ケールで具現化しているのである。巡礼者
 は都市内の巡礼路を巡還することで、同時
 に世界全体をも巡還することになり、都市
 は巡礼者と世界の媒介装置として聖性を
 獲得するという、きわめて整然とした構図
 がここには成り立っている。

実のところ歴史的に見れば、これらの巡
 礼路は必ずしも聖跡に基づいて自然発生
 したわけではなく、時どきに創作され修正
 されてきた。身も蓋もなく言えば「後付け」
 である。しかしながら、巡礼地となってい
 る寺院や祠は、日本の寺社がそうであった
 ように、地域コミュニティの生活や信仰、
 交流の核でもある。現代的な視点で見れ
 ば、この巡礼は迷路のように複雑な街路を
 巡礼路というナビゲーションに導かれ、都
 市各部の地域コミュニティを順次訪ね歩
 くという都市周遊ツアーともいべき側
 面をも有するのである。そう考えると、個
 人と地域、さらには都市・世界とを結びつ
 ける「メディアとしての巡礼路」の価値は、
 今も注目に値するのではないだろうか。

マドurai (Madurai)

南インドの南端部タミル・ナドゥ州一
 帯にはヒンドゥー教の大寺院を中心に抱



左 | 図3: ヴァーラナシー旧市街の様子 右 | 図4: 同心円を描く巡礼路群とその構造ダイアグラム



左 | 図5: マドuraiの都市形態 右 | 図6: 同心方形街路を巡行する巨大な山車 (出典: Devadoss, Manohar, "Multiple Facets of My Madurai", Madras: EastWest Books, 2007)

く「寺院都市」が数多くある。その最大のも
 のがマドuraiである。マドuraiは、中
 心にある巨大なミーナクシー寺院を同心
 方形街路が四重に囲繞するという、特
 異なマンガラ状の形態を有する珍しい都
 市である(図5)。この都市形態は、16世紀
 頃この地を治めた王朝の首都として、計画
 的に建設されたものである。

南インドでは古くから王権と寺院の結
 びつきが強く、寺院の社会的・政治的な重
 要性の増大と並行して、寺院建築は周辺
 住民の集会や教育・演劇のための建物をは
 じめ、次第に居住地をも境内の中に囲い込
 みながら複合化・巨大化を遂げ、やがて都
 市的な様相を帯びていった。寺院建築は
 そもそも単体として、ヒンドゥー教のコス
 モロジーの空間的表象として計画されて
 いたのであるが、それが都市スケールまで
 拡大適用されたものが、マドuraiを代表
 とする「寺院都市」である。

マドuraiでは、このような都市の象徴
 的構造をトレースし再確認する祭礼が今
 も続けられている。タミルの暦に従って月
 に1度、神像を乗せた山車や神輿が街路

を巡行するという、日本各地で見られる山
 車祭りにも似た祭礼である。同心方形の
 それぞれの街路を巡行する軌跡は、1年
 かけてマンガラ状の都市構造をトレース
 することになる。とりわけ4月から5月に
 催されるチッタレイ祭は、都市建設当時の
 市街地最外縁であったマシ通を、イスラム
 教徒さえも含む都市の全住民が参加して、
 巨大な山車を引き回すという盛大なもの
 である(図6)。そこでは、神々が世界=王
 国の縮図である都市を幾重にも巡ること
 で、領土全体に対する神=王の支配権が
 繰り返し表現されているのである。

このような都市構造を補強する祭礼は、
 実はマドuraiの整然とした都市形態に
 歪みを与えてもいる。歪みはマシ通の四隅
 が(直角でなく)丸みを帯びた鈍角である
 ことに起因するが、これはマシ通を巡航す
 る巨大な山車が、スムーズに旋回するた
 めに生じていると考えられている。都市に投
 影された理想像の実地運用にあたって生
 じたズレという点で、興味深い現象であ
 る。